

[研究ノート]

恋愛の哲学へのアプローチ

村 瀬 鋼

1 はじめに

私はいま、恋愛の或る哲学を企てたいのですが、私自身にとってすらまだ不明確なこの哲学の臚気な姿を、ここではとりあえずクロッキー風にスケッチしてみたいと思います。

恋愛とは、一人の私の或る独特な経験のかたち、すなわち、一人の私とその身も心もすべてをもう一人の別の誰かに差し出しながら、文字通り全身全霊でその誰かの全身全霊を味わいつくそうとする、そのような私の決意、情動、対他関係であり、またそうした決意、情動、関係を生起させる出会いの出来事、実存の冒険、認識の覚醒です。

恋愛の哲学とは、そのような恋愛の固有の「真理」を探求することを意味します。

考えてみると、哲学という分野において恋愛が主題化されることは実質的には稀でした。なるほど、稀な例外のなかには際立った考察が見られるとは言え、大抵の場合、一人の人の別の誰かに対する恋愛は、個人を超えた全人類や人間以上のものに対するより素晴らしい愛に従属させられたり、人間のより一般的な存在の仕方に基づいて説明されたりするにとどまり、恋愛固有の持分がそれ自体として十分積極的に評価されるには至っていないように思われます。そしてそれは、哲学なる「学問」の一般に理解されている性格からしても、ごく自然なこととも言えます。恋愛とは、我々の経験において平凡でありふれた事件であるとはいえ、常識的に見て、明白な普遍性を主張できるような何かではなく、所詮はやはり特殊な一経験でしかありません。恋愛とは、ありきたりでこそあれ、普遍的な経験ではなく、特殊な一個人が、人により、また時により、持ったり持たなかったりする、どこか特権的であ

るとともに一時的な、或る特殊な経験なのです。間違っても、「恋愛をせよ、恋せよ」ということを、道徳的な定言命法に仕立て上げることはできないでしょう。それはまた大抵の場合、個人がしばしば人目を忍びながら執り行う営みでもあり、「人間として」それに関わることが公然とした立派な意義を持ちうる何かではおよそありません。ですから、恋愛について、体験談やマニュアル本は流通しても、恋愛についての哲学は哲学の座談においても恋愛の座談においても、最初からどこか座りどころのない珍妙な客人であるかのように思われます。

けれども、恋愛は、それが実際に一人の私の経験となった場合に、私の存在の全体を根本から揺るがすような何かでありえます。また、いかに秘められた、また秘められるべきことであったとしても、恋愛という経験の成分は、さまざまな婚姻や家族形成の形態のもとで、さまざまな禁圧や変形を受けながらも実質的には、子を産むという、つまりは人間そのものを製造するという、この我々の社会の根底そのものにある作業を黙々として推進してきた一つの力でもあったはずです。さらにまた、話を一見して低いところに引き下ろせば、若い人たちの多くにとって、恋愛とは、一方ではたんなるゲームのように語られもしながら、あらゆる関心の中心にあって絶えず心を強く引き付ける何かであり続けているように思われます。そのような恋愛について、それが我々に教えてくれる人間存在のなにかの真理について、哲学はもっと真剣に考えてみてよいのではないのでしょうか。

恋愛とはおそらく、ひとがそこに入っていくときに、その経験そのものがあまりにも深く鮮やかであるゆえに、もはやそれ自身の明視力によって見抜かれること以外のいかなる理解をも必要とせず、それゆえに哲学が一切不要となってしまう、そのような何かでもあろうかと思われます。哲学は経験を、

生を理解しようとはしますが、そのような理解そのものが、恋する人にはもはや不要で余分なのです。けれども経験を理解する哲学は、経験というものが、その経験としての真骨頂においては、おしゃべりな哲学とはまったく別の沈黙の経験そのものであるということをも理解します。それゆえに却って、いかなる理解も役に立たないかもしれないこの経験のなかに、結局はたかが理解でしかありえない自分が相手取るべき特別な主題を見出す、そのようであってよく、むしろそのようであるべきでさえあるのではないのでしょうか。

およそそのようなところが、恋愛の哲学という企てへの最初の手探りですが、この手探りが何を探りだそうとしているのか、もう少し、わずかにでも明確化するよう、試みてみましょう。

2 二つの一般的な問題

「恋愛の哲学」ということで私が考えようとしていること、「恋愛の哲学」という土俵の上で私とその諸々の勢力を戦わせようと思っている問題は、まだ私自身にとっても整理不足ながら、さしあたり二つあると言えそうです。

一つは、「他者」の問題であり、もう一つは「美と倫理」の問題です。

こう述べただけではいかにも曖昧で空虚なものに思われますので、それぞれの内実について順に説明してみたいと思います。

(1) 他者の問題

まず一つ目、「他者」の問題ということで私が考えていることをお話しします。話を簡明なものにするために、手っ取り早くエマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas, 1906-95) の提示している構図を流用します (レヴィ

ナスがいたるところで提示している構図故、出典指示は割愛します)。

我々の生活している世界には、注目すべき非対称性 asymmetry があります。この世界には私ならぬ他人といった他者がいて、そうした他者は、一人一人、まさに私とは別なる他者として、しかしまたこの私と少なくとも等しい資格を持つ何者かであるという権利要求を私につきつけつつ、彼方から私に現れてきます。このとき、私と他者との相互関係は、ひっくり返しても同様に成り立つ対称的 symmetric で可逆的 reversible な関係ではなく (或いは少なくとも、可逆的な関係である以前に、また関係が可逆的たりうるためにも)、まずは不可逆的な関係、非対称的な関係です。なぜなら私はいつもここにいて、他人はいつも彼方にいるからです。或いはむしろ、我々は、ここにいる者のことを「私」と呼び、彼方にいる者のことを「他者」と呼ぶのだ、と言ってもよいかもしれません。

ところでしかし、我々はこの状況を、ただその通り生きるのではありません。ただその通り生きるだけではないし、その通りにだけ生きるのでもありません。つまり我々は、おとなである我々は、通常、私が他者と対峙しているこの状況を、あたかも上空からのように俯瞰して、私と他者との非対称的で特異な関係を、人間 A と人間 B との対称的で一般的な関係として了解します。その了解の下では、他者はすでに、私とは別なる他者としての性格を薄れさせ、私と同じく人間であるものとして、私と同じく、人間なる種の一例であるものとして、性格づけられています。

このような了解、ないしはこのような了解がそれ自身の地平として想定している場を、レヴィナスは「全体性」と呼びます。そこでは、あらゆる個々のものが、一なる全体のなかで、一なる全体を織り成す諸々の文脈のなかで、意味づけられ価値づけられることになり、私の私性や他者の他者性などと

いったものは、そうしたいわば客観的な意味や価値に対してせいぜい二次的でしかない付帯的属性に成り下がります。これは何も異常な事態ではなく、我々が自分や他人や社会や世界を理解するときのごく通常の仕方なわけではありません。そこにあるのは主観性と客観性、生きられたものと考えられたものとの平凡で健全な対立にすぎない、とも言えます。けれども、元来はこの地上での誰かと誰かとの呼びかけと応答であったものが、プロンプターつきのモノログで語られる非人称的な単一のロゴスにすりかえられて、あたかも天上からのような、聞く耳を持たない法や命令として働くとき、我々は、一つの社会の相対的安定と引き換えに、我々各人がそれである個別的な存在がその意味とともにさまざまな仕方で脅威にさらされるのに立ち会うことになります。誰しものが多少とも実感していないわけではないその脅威、その危険の実際については、ここで立ち入って例示する必要はないでしょう。

レヴィナスが試みたのは、このような全体性の論理の支配に抗して、最初の非対称性の布置を、自他の還元不可能な二元性としてあらためて浮かび上がらせることであつたと言えるでしょう。最初のこの非対称性は、全体性の論理に抗して我々の生の意味を我々に獲得し直させてくれるものであるわけですが、それと同時に、そもそも一なる全体としての全体性の構図は、一なる私の了解に基づくものでもある故に、非対称的關係の一端に位置する唯一の私なるものは、この全体性の論理を機能させている当のものでもあります。その私の他者との面接を語るレヴィナスは、しばしば他者への献身を説く説教臭い哲学者だと誤解されていますが、実のところ彼は実際にそのような我々の経験の在り様を、独特な誇張法を用いながらも基本的にはただ現象学的に記述し提示しているだけなのであって、レヴィナスの狙いは、道徳的な選好によるものであるというよりも、単純に、経験に寄り添いつつ

ねに根本的なものへと向かう哲学なるものの自然な傾きに添うものと考えた方がよいでしょう。

さて私は、全体性の論理に抗して一なる私と別なる他者との非対称的關係をあらためて「ほらここに」と提示しようとするレヴィナスの所作を、哲学的な所作として、ということは、哲学ならぬ生それ自体に対して哲学がなす所作として、非常に重要なものだと考えています。その所作は私を驚かせます。その所作は、その所作が指し示すものによって、その指し示されるものが驚くべきものであることによって、私を驚かせます。ここに一つの、一つでしかない私がいて、かしこに他者が、この私ならぬながら私のもう一つのものとして資格づけられる或る別なる誰かがいるということ、これは何か驚くべきことだと私は思います。なぜかと言えば、まず、これは通常は隠蔽されていること、秘せられていることだからです。おとなである我々は、すでに素朴さを欠いています。我々は一つの全体である舞台、全体性の舞台の上で、筋書きのあるドラマの諸々の登場人物の一人を演じる役者であり、我々は言わば、世阿弥の言葉を借用すれば「離見の見」のようなものによって、夢のなかでのようにその役者の演じぶりを、薄暗い客席から眺めています。我々はあたかも、自分がたまたまそのたんなる一登場人物である演劇を、生身は暗い客席に置きながらどこか他人事のように眺めている、そんな奇妙な上の空の演出家でもあるかのようです。この演劇こそが我々が日々「現実」と呼んでいるものなのですが、驚くべきことに、いまやカギカッコ付きで言われるこの「現実」は、もう一つの生身の現実から見るとどこか幻めいたもので、せいぜい空騒ぎにすぎないものなのかもしれない、そのようにも思われます。すべてを承知顔の演出家は、実は何もわかっていないのか、或いは知っていたはずのことを忘れてしまっている。ここにある私なるものの生身

を生きる深い感情と、彼方に別の誰かを見てとる明視力、またその誰かに応答する真摯さといったものを、彼は手放してしまっている。そんな演出家自身である者にとって、私がついて他者がいる、というこの単純な根本的事態は、それが引き起こした驚きのあまりに思わず身体を客席から立ち上がらせてしまうような一つの驚嘆事であるのではないのでしょうか。

そこで、恋愛という話題に話を引き寄せて言うならば、恋愛とは、はたして、このような驚きの一つの深いかたちであるのではないのでしょうか。恋愛には、あたかも恋人たちがそれぞれ孤独な快楽を貪るだけであるかのような局面があるとしても、もし恋愛が、たんなる生理的欲求の解消や昇華とは別の性格を持つものとして、その不安定な名に相応しい何ものかでありうるのだとしたら、その根本には、私がここにおいて、私ならぬ別の誰かがかしこにおいて、そのことの純粋な驚きを、ここにいる私が、何のためにでもなく、私自身のためですらなく、ただそのこと自身の故に喜びとして感受する、という、無数の恋歌がさまざまな紋切り型で歌ってきたこの恋愛の情念が、やはりあるはずだと思われます。

そして実は、我々がこのようにして驚くことができ、この驚きが深い喜びと悲しみとを伴いうるということ、このことがまた、哲学にとっては一つの驚きです。我々にとってこのような驚きがあるのだとすれば、私と別の誰かとの関わり、私にとっての一々の別の誰かの存在の意味は、はたしてどのようなものでなければならないのか。そこに哲学にとっての謎があります。私と他者との或る格別に深い関わりとしてのこうした恋愛なるものが、私と他者との関わり一般の一つの目立った可能性として成立しえているのだとすれば、私の対他関係一般、私にとっての他者の意味一般は、はたしてどのようなものであることになるのか。これが私の恋愛の哲学のまず第一の一般的な

問いということになるでしょう。

もっと柔らかい言葉で言えば、これは、「人を好きになる」とはどのようなことか、という問題でもあります。私は人を好きになることがある。当たり前の平凡事ですが、これはとても不思議なことのようには思われます。私は誰かを好きになることがあり、しかもそれはしばしば、あらゆる利害関係なしに、或いはまた、あらゆる利害関係にもかかわらず、あらゆる利害関係を超えて、なのです。この「なぜ」がまず謎ですが、さらにまた、そもそも「好き」とはどのようなことであるのか、これもまた、よく考えてみると不思議なことです。「何かを」好きになったり嫌いになったりすること、「誰かを」好きになったり嫌いになったりすること、この二つの間の違いや繋がりも、考えてみる必要があるでしょう。

「人間」の定義や「私」の定義について、ひとは様々に考えてきました。人間が理性的動物である、とは、理性的であることを欠けばその者はもはや人間ではない、ということです。私は思うものである、とは、「思う」という働きなしでは私は何ものでもない、ということです。では、もし私が、誰かを好きになる、ということとその本質的な一可能性として持つのだとすれば、私とは、また人間とは、はたしてどのように定義されるものでありうるのでしょうか。

以上、まずは恋愛の哲学と「他者」の問題との関わりについて述べました。

(2) 美と倫理の問題

次に、恋愛の哲学は「美と倫理との関わり」の問題に関わります。

括弧を開いて言えば、ここで、平仄を合わせようとすれば「美と倫理」よりも「美と善」の方が良さそうにも見えますが、ここで言う「倫理」とは善

といった一般的価値を指すのではなく、レヴィナス流の「私と誰かとの関係」のことを指すので、この方が座りがよいと考えます。或いは、別の仕方で平仄を合わせようとするならば、「美と倫理」は「価値と倫理」と言い代えることもできそうですが、しかし問題となる価値は感性的なものなので、やはり最初の言い方が適当でしょう。

括弧を閉じて、立ち戻れば、「美と倫理」という二つは、哲学では、古代のプラトンなどでははっきり結びつけて理解されていたと言えますが、近代以降は、カントの第二批判と第三批判の違いや、キェルケゴールの美的実存と倫理的実存の区別などを思い浮かべても肯かれるように、互いに水準を異にするものと扱われるのが基本となっています。日常的な実感としても快苦が問題になる「美」の領域と、善悪が問題になる「倫理」の領域とは、きわめて異なっていて、場合によっては対立関係にあるようにさえ感じられます。なぜなら、「善」の遂行はしばしば「苦」であり、逆に「快」の追求はしばしば「悪」であるように思われるのですから。

しかし、「美」と「倫理」とのこのような区別は、本当に適切なものなのでしょうか。なるほどその区別がもっともな区別である局面は少なくないにしても、両者が一つになっていくところにこそ人間の経験の深みがあるということはないのでしょうか。「美」は「倫理」をその深みに持ち、「倫理」は「美」をその徴表とする、といったことはないのでしょうか。

恋愛という主題は、この問題を考えるのにはうってつけの土俵になるように思われます。なぜなら恋愛には、美と倫理との密接な絡み合いが見られる、ないしは少なくともそう想定されるからです。

恋愛は、社会的に見れば、なるほどなにがしか不道德なこと、必ずしもいわゆる「不倫」ではなくともどこか「不倫」めいたところを持っているもの

です。恋人たちは、社会のなかの一員としての役割を離れて、この世の大小の全体性のなかで割り振られた役割を演じることをやめて、ただ二人だけの世界を、他に何もなくて自分ともう一人の誰かだけがいるような世界をつくります。そこで彼らは恋の喜びを、あたかも禁じられたものを楽しむかのようにして楽しみ、溺れるようにそこに身を浸します。けれども、恋人たちの眼からすれば、恋愛それ自身のなかに、世間の道徳以上に真正のものである倫理、多数者の一般的行動基準ではなくて或る私の別の誰かとの直接的な関係そのものであるような倫理というものがあり、そしてこれは、美しいものとしての快樂に背馳するものであるよりも、むしろそれと共存するものなのです。恋愛は、たんに不道徳で墮落した快樂であるのではなく、反対に、それがそのような評価の切り下げを被るためにも、根本的には、二つの人格の間での、無辜な喜びを伴った真摯な倫理的関係であると私は思います。恋人たちは恋に酔って盲目になっているのではなく、社会生活では隠蔽されてしまう生の深み、一人の私が別の誰かとともに生きるというこの単純なことから蓄えられている生の深みを、覚醒しながら経験するのではないのでしょうか。そこにはむしろ、社会生活における美と倫理とがその散文的表現でしかないような、人間関係の詩のようなものが見出されます。

恋愛における美は、たんにエゴイスティックに求められるだけの快樂ではなく、一見たんにそのように思われる快樂ですら、実際には或る倫理に基づいているのではないか、というのがさしあたりの私の見立てです。恋愛のことを考えるときには、私が或る誰かを思い、その誰かに身を捧げようとさえる、という、そうした或る誰かとの関わりのなかにこそ、およそ何かが特別に美しいものとなる理由があるのではないかとさえ思われてきます。例えば、恋が成就するとき、恋する人は、たんに恋人の肉体だけではなくて、

恋人たちを取り巻く諸々のもの、或いはむしろ世界全体が、異様な美しさで輝くのを経験することがあるわけですが、その理由について、我々はよく考えてみる必要があります。

私が考えてみたいことは、より一般的には「美」の秘密、「美」の源だと言うことができるかもしれません。何かが「美しい」と言うとき、その「美しさ」はいったいどこからくるのか。それは「美」そのものからであり、「美」のアイデアからだ、と答えるほかないのでしょうか。さしあたってたんなる私の予感として言えば、ことによれば「美しさ」は、つねに「誰か」と関わりを持っており、何かが「美しい」というとき、その何かは必ず「誰か」とこの関わりゆえにこそ「美しい」ものたりえている、ということはないのでしょうか。通常我々は、愛しい誰かについて、その「美しさ」ゆえに「好き」になったのだと考えますが、むしろ本当は順序が逆で、(スタンダールの「結晶作用」が意味することや、「あばたまえくぼ」といった多くの卑近な言い回しが示しているように) その誰かが我々にとって「美しい」のは、その誰かを「好き」だからなのだ、と言うことはできないのでしょうか。実のところ、その誰かを気にかけ、その誰かが気になるということのなかに、その誰かとその誰かを取り巻くものの私にとっての美しさの由来があるのではないのでしょうか。

以上のようなことはいまのところ私のたんなる予感にすぎず、説得的な議論を用意するまでにはいたっていませんが、恋愛ということがらの成り立ちを考えていくことで、この付近の諸事情がいくぶんか理解できるようになるのではないか、と思われます。そして、「美」と「倫理」をもしこのように繋げてみることができるとすれば、少なくとも我々のものの見方のなかにおいて、一方では「美」というものは、時折の観賞物に結び付けられた値札の

ようなものではなくて、正当な仕方であらう我々自身の日常の情緒であるものとして捉え直され、他方では「倫理」というものは、道学者風の「善」から解放されて、我々の日々の歓喜と共に歩みうるものとなるように思われます。

以上、恋愛の哲学に関わる「美と倫理」の問題、ということについて、いま言えることだけを述べてみました。

3 具体的な諸展開

では私の恋愛の哲学は、より具体的には、どのような展開を持つものなのでしょうか。

私は恋愛の哲学を、さしあたり経験の現象学として進めてみたいと思います。恋愛とは一つの経験であり、その経験を現れるままに記述することが、それについて語るための第一歩であろうからです。そこで問題となるであろう経験の諸成分ないし諸局面を、以下、覚え書き風書き留めてみることで、今後の実際の諸展開への足がかりとすることにしたいと思います。

(1) 私の本質を形成するものとしての美＝情動

まず私は、喜び、快楽、享受、ということについて考えてみたいと思います。恋愛は比類ない喜びを与えるもの、ないしは少なくとも与えうるものであり、まだ得られない喜びやすでに失われた喜びを求めようとする切なさを伴うものです。喜び、快楽とは、一見単純なもののように見えます。そこには何の神秘もなく、我々が喜びを求めるのは当然のこととして、それ以上そこに何ら言うべきことはないように思われます。けれども、喜びとは不思議

なものです。いったいそれは何であるのでしょうか。驚くべきことに、我々がこれ以上なく明らかに知っているとも言えるこのものの正体を、我々は或る意味ではいまだ知らないのです。おそらく、この謎めいたものの由来を明らかにすることは望みえないでしょう。それでもこれだけは明らかでなくはないことと思われるのは、喜び、といった情動が、「私」なる存在と結びついていること、或いはむしろ「私」とはこうした情動の実効的な存在以外の何ものでもないのですらある、ということです。この点で私は、主観性の本質を、情動性 affectivité として、言い換えれば、感じていることの自己感受そのものとして括り出したミシェル・アンリ (Michel Henry, 1922-2002) の見方に同意します。アンリがその著作のいたるところで繰り返し提示していることによれば、情動性は必ずや「自己性 ipseité」を伴っており、自己触発としての情動性は「私」の存在に等しいもの、「私」の存在を定義するものです。もしそう考えてよいのだとすれば、恋愛は、たとえ取り繕われた社会的自我を取り壊して文字通り忘我の境地に至ろうとする営みではあるとしても、「私」を消してしまうどころか、むしろまさにその忘我の喜びのなかでこそ、いまここに真に実在すると感受される自己の存在を、鮮やかに輝かせうるものだとも言えます。

(2) 肉体と感性的世界

次に私は、我々の肉体とそれを取り巻く根本的には感性的な世界のことを考えてみたいと思います。肉体は、恋愛においてたんに無視できないものであるどころか、きわめて重要な要素です。スタンダールの言うように、例えば恋人の手を握るとするのは恋愛の最高の瞬間です (『恋愛論』)。ビートルズの名曲 «I want to hold your hand» は、不適切かつ適切に日本語タイトルで

は「抱きしめたい」と訳されていますが、恋する相手を抱きしめたいと思わない恋愛はなく、抱きしめたいと思うからこそそれはまさに恋愛なのです。そのエクスタシー（恍惚・忘我・脱自）のなかでいかに脱肉的な天上界へと人を誘おうとも、「心身合一」の現実、「身も心も」の熱がなければ、恋愛はありえないでしょう。ところでそこで問題になるこの肉体は、情動を本質的成分として含む感性的世界の局所に場所を持ち、自らを中心にしてこの感性的世界を情動のかつ実践的な意味世界として構造化します。恋する人が出現してくるのは、すでに諸々の意味作用によって磁化されたこの感性的世界のなかになくであり、一つの肉体を持った存在としてです。そこで私は、肉体を中心にした感性的世界の基本的な風景を、恋愛の環境として素描してみたいと思います。

(3) 他者を示すものとしての情動、私の二元性

続いて、さて、様々な美を持つこの感性的世界のなかで、私を定義している情動性は、一方では孤独なものでありながら、他方では他者の影を宿してもおり、そればかりか或る意味ではそれ自体、他者の顕現そのものでもあります。情動性は、アンリによれば純粋な自己触発 auto-affection であり、そこにはいかなる外部性も他者性も含まれません。けれども、アンリも認めているところの、私の自己触発の根本的な受動性を考えるならば、この自己触発は、まったく同時に、そこに働きかける他者による触発でもあると理解される余地を十分に持ちます。例えば、レヴィナスが、デカルトにおける私と神との関係を重ね合わせながら、内在的私の超越的他者からの触発を語ろうとするとき、アンリの読者でもあったレヴィナスはアンリの考え方のこのような換骨奪胎を企てているのだと言うことができます。実際、我々のあり

うべき現象学的な記述に立ち戻るならば、私を満たし私をつくる情動というものは、そのまま、彼方に見え隠れしながら私に合図を送る他者の情動そのもの、とまでは言えないにしても、少なくとも他者が一人の誰かとしてそれであるところの或る情動の或る感触、その優しさや苛烈さ、しかもつねに誰かの、つまりは顔を持つはずの誰かの、優しさや苛烈さであるのではないでしようか。例えばレヴィナスは、女性的なものであるそのような「優しさ」についてときに言及しもするのですが、あらゆる議論を通じて、私の存立に関わる還元不可能な二元性を繰り返し強調します。私の自己自身との関係とも縁を持つこの二元性についてのレヴィナスの思考は、容易には解きがたい複雑さを備えています。我々自身の経験に問い訊ねてみるだけでも予感されることとして言えば、一人の私はつねに、私ともう一人の誰か、という、ただの一人の孤独さには回収されえない二元性のなかに置かれているのではないでしようか。

(4) 恋人との関係

では恋人たちの関係はどのようなものであることになるのでしょうか。以上に素描してきたことを引き継いで言うならば、恋愛とは、私にとって構成的な二元性の、特定の誰かを中心にした享受そのものであるように思われます。これについて、いまここで十分な展開をする準備を私は持ち合わせていないため、ここまでのところでも私が暗に明に参照しているレヴィナスの言い方を提示して方向の目印とすることで当面の場を埋めることにしましょう。レヴィナスは特に主著『全体性と無限』において、四部構成のこの著作の最終部を「エロスの現象学」に宛て、そこで恋人たちの関係や子の誕生を、彼の考える倫理ないし社会性の成立の控え目にみてもきわめて重要な契機と

して分析していますが、その分析の内容をはじめとして、我々の考察にとってきわめて示唆に富む諸々の考えがレヴィナスには見出されます。周到な拾い出しはできませんが、例えば近年公刊された著作集の、これまで未公刊だったメモのなかから、いくつか並べてみましょう。

引用します。「自我は二である。」「二元性と他人の神秘—これは愛の基底そのものである。性 [sexualité]。「利己主義－利他主義」の問題を乗り越えさせてくれる考え方。なぜならエゴは、私における愛の外では定義されないからである。自我性にとって構成的な性愛。愛の古代的考え方との断絶。」「間隔とその幸福の力は、二であるという事実の幸福を説明してくれる。愛において本質的なのは、二つの存在の結合があるということではなく、二つの存在があるということである。」「欲求とエロスとを区別するもの—それは、欲求とは、二元性が消滅してしまう踏み越えられた間隙である、ということである。それは主体による外的世界の同化である。あらゆる満足した欲求は、第一に飽食、食べたという事実である。食べることの優位性 (…。まさにこれこそが欲求の享受の意味作用である。エロスにおいては、二元性こそが享受そのものである。」「エロスの分析のために。間接的な感情、すなわち他人の苦しみに苦しむこと、他人の喜びに喜ぶこと。独自の反省。」(Emmanuel Lévinas, *Carnets de captivité et d'autres inédits. Œuvres 1*, Grasset/Imec, 2009, p.113, 114, 119, 120, 144, 90.)

これらのレヴィナスの言い方を利用して言えば、恋愛とは、他人の歓びに歓び、他人の苦しみに苦しむことです。それは、私自身の情動のなかに他者を回収してしまうことなく、私の外におり私とは別なるものである他者との二元性において、他者からの触発として自らを生きることです。そこにはレヴィナスが言うところの「平和」が、つまり、一人の私が一人の他者と、

互いに分離され、隔てられながらも、隔たりのなかでいわば触れ合い、距離をおいてただ共に在るというただそれだけのことが、一つの情緒、一つの歓びとして享受される仕方で、しかもその享受こそが当の私身の中身をつくっているような仕方で存在する、というこの状況が見られます。恋愛は大抵の場合にはどうしても葛藤や苦悩をも引き連れてくるとしても、もしそれが恋愛と資格づけられるのであれば、そこにはいつも、この最低限の平和があるにちがいない、と私は思います。そしてそれは、私の「自我であること」にとって根本的な意味をおそらく持っているのです。

(5) 恋と死、および「子」を生すこと

恋愛に関して、私はさらに、「死」という事柄と「子」という事柄を考察してみたいと思っていますが、その中身は以上の事柄にもましてまだ不明です。ただ申し訳に、何らかの目印になりそうな事柄だけをここに記しておきたいと思います。ちなみにこれらについても、やはりレヴィナスが興味深い考察を展開していますが、レヴィナスへの言及もここでは控えます。

まず「死」についてですが、これは私と他人との決定的な分離を示すものであると思います。私と他人との関係とは、私が死んでも他人が死ぬことはなく、他人が死んでも私は死ぬことはない、という関係です。私と他人とは生をも死をも別にする存在なのです。そしてそこに対他関係の、ということとはつまりは人間の、悲しみがあります。ロミオとジュリエットの悲劇とは、最も深く純粋な恋愛にあっても、人は同時に死ぬことはできない、ということであり、どんなに深く愛し合っている、人は恋人の生死さえ確認することができない、ということだと思っています。周知のように、仮死状態で眠っているジュリエットを見て、恋人の死を誤って確信したロミオは、恋人の死後

に自分が生き残っていることを悲しんで、自死します。目覚めたジュリエットは、今度はたまたま正当にもロミオの死を確認し、しかし同様に死に遅れたことを嘆きながら死に向かいます。このタイムラグ、この穢い除けがたい誤認の可能性が、私と他人との絶対的な分離を物語っています。それでいて、この分離にもかかわらず他者との出会いや他者の享受といったものがありえ、そこに私はともすれば命をかけさえるということ、この一見すると奇蹟めいてさえみえるこの事態が、恋愛においては平凡なことになっているのです。

次に「子」についてですが、まず、恋愛が生殖に結びつく、ということは、文字通りの意味では素朴には言えることではありません。恋愛と性行為と生殖との三つは、もちろん深く関わりながらもそれぞれ別のものであり、特に三番目の生殖、つまり妊娠出産は、恋愛とはいったん区別して考えた方がよいと思われます。それは、子をなさないカップルや子をなさない性行為が無数にあることからしても自明のことです。けれどもしかし、恋人との関わりが、現実的に人間の製造としての子の産出にまで事を導きうる要素をもっている、ということは注目すべきことです。恋人との関わりは、自己と恋人とが持つ身心を合わせた全能力の徹底的な行使の末に、ついには、人間がもつ一つの究極の可能性として、しかも我々のあらゆる能為を超えた極度に受動的な可能性として、もう一人の人間を製造するところにまで至りつきかねないのです。このことを私は、私と恋人との二元性のなかで、二つのものの中で、たんに肉をもった実際の子にかぎらず、比喩的な意味での子をも含めて、どちらの能動性をもどちらの意志をも超えた何ものかが、それぞれの分身のようにして誕生しうる可能性一般として理解したいと考えます。考えてみればプラトンも、エロスの導きによって恋する人のなかに孕まれるものの出産

についてすでに語っていました。

死と子、というこの二つのテーマは、おそらく密接に絡み合っています。ここではその最低限の筋道をすら描いてみせるだけの用意を私は持ちませんが、死ぬ者こそが子を生すのであり、子を生す者は死ぬ者であって、子を生す死ぬ者とは恋すべき他者を持つ者、すなわち人間のことである、そんなふうに言ってみることもできそうに予感されます。

以上、恋愛の哲学の一つのアプローチについてお話ししました。まだまとまりよりも綻びの方が圧倒的に目立つ企てのスケッチでしたが、綻びはそこから新たな青空が見えもする開口部でもあるのですから、無理に補修を試みずにそのまま放置しておくのが最善だとも言えるでしょう。

付記) 本稿は、2013年7月5日に成城大学の「物語研究会」で読まれた報告の原稿である。